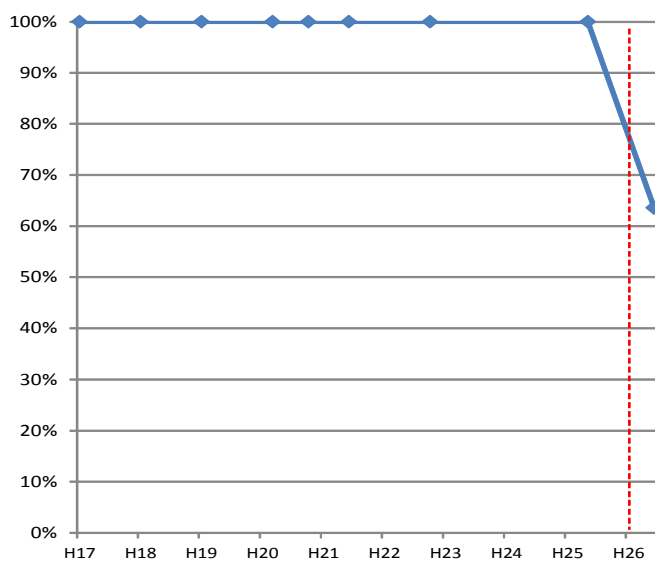


樹種名	トチノキ	
科 目	トチノキ科	
学 名	<i>Aesculus turbinata</i>	
分 布	北海道・本州・四国・九州に分布しているが、なかでも東北地方に顕著に見られる。	
樹木特性	陰樹であり、山地の凹状地や溪谷のやや安定した場所に生育する。照葉樹林や二次林に生息し、暗い環境でも成長し耐陰性がある。また、比較的長寿な樹種であるため稚樹が暗い環境にある程度耐え閉ざされた林冠の下でも前生稚樹を形成できる。 生育環境が良好な場合では、寿命は最大樹齢が 100 年以上と推定され、埋土種子は無い。	
用 途	街路樹、公園樹、建築・器具・楽器材として利用。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	22 本 (他樹種との混植)	
特 徴	【樹 形】 落葉性の高木で、温帯の落葉広葉樹林の重要な構成種の一つ。水気を好み、適度に湿気のある肥沃な土壌で育つ。谷間では、より低い標高から出現することもある。 サワグルミなどとともに姿を見せることが多い。木はとて大きくなり高さ 25m、太さも 1m を越えるものが少なくない。 葉も非常に大きく、この区域では最大級の葉である。葉柄は長く、その先に倒卵形の小葉 5~7 枚を掌状につけ(掌状複葉)、全体の長さは 50cm にもなる。葉は枝先に集まって着く。 5 月から 6 月にその葉の間から穂状の花序が顔を出す。穂は高く立ち上がり、個々の花と花びらはさほど大きくないが、雄しべが伸び、全体としてはにぎやかで目立つ姿である。花は白から薄い紅色。木材は家具などの材料となる。その外には、街路樹に用いられる。	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、病虫獣害も特に見られず、現存率も 64 % と良好であった。	
被 害	特になし。	

トチノキ 現存率



【現存率】

H25.6 時点で調査木の現存率は 100 %であり、良好である。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 63.6%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

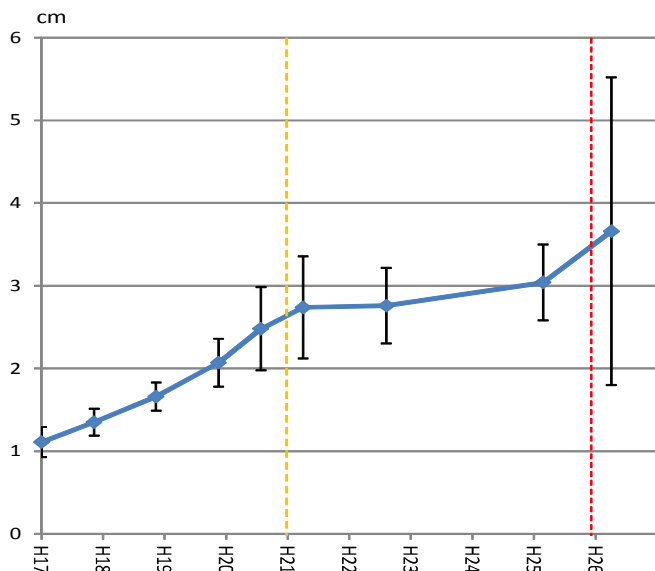
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 3.66 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

トチノキ 根元・胸高直径



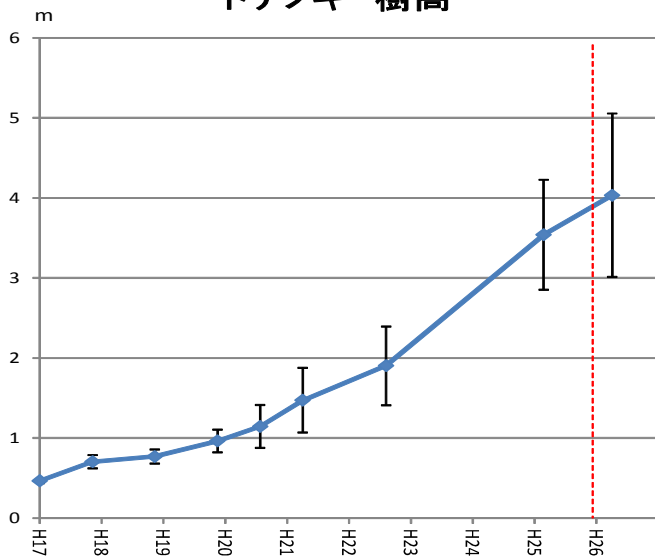
【樹 高】

植栽後、順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 4.03m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

トチノキ 樹高



《プチ情報》

パリの街路樹のマロニエは、セイヨウトチノキといわれ実のさやに刺がある。また、マロニエと米国産のア



カバナトチノキ (Aesculus pavia) を交配したベニバナトチノキ (Aesculus x carnea) も街路樹として使用される。日本では大正時代から街路樹として採用されるようになったが、湿気のある土地を好むため、街路樹としては立地条件が適さない場合がある。

巨木になるものが多いので、昔はくり抜いて臼を作るのにもよく使われたが、最近では主にテーブルなどに使用される。木質は芯が黄金がかった黄色で、周辺は白色調。綺麗な杢目がでることが多い。また真っ直ぐ伸びる木ではないので変化に富んだ木材となりやすい。比較的乾燥しにくい木材で、乾燥が進むと割れやすいのが欠点だが、21 世紀頃にはウォールナットなどと同じ銘木級の高価な木材となっている。

トチノキ種子のエスチン(escin)類、イソエスチン(isoeschin)類には小腸でのグルコースの吸収抑制等による血糖値上昇抑制活性が認められた。

デンプンやタンパク質を多く含有する種子は渋抜きして食用にする。現在では、渋抜きしたものをもち米と共についた栃餅(とちもち)などは土産物として販売されている。

このことから、各地に残る栃谷や栃ノ谷などの地名も多い。